

日本語における終結詞「ダ」の機能について

飯 島 周

Summary

In this article *da* is supposed to belong to the tentative word-class of conclusions, whose function is to mark the end of a sentence and give a kind of modality. Many theories, including transformationally-oriented ones which regard *da* as a kind of pro-verb, are examined. The final analysis is carried out from the viewpoint of Functional Sentence Perspective (FSP) and Communicative Dynamism (CD). It reveals the fact that *da*, as the medium (M) defined by the present author, carries the medium degree of CD in FSP so as to link the rheme (R) with the theme (T), composing the standard distribution of CD in Japanese (T-R-M), in contrast to many European languages (whose standard distribution of CD is T-M-R, identical with the basic distribution of CD), and also that *da* is not a pro-verb but a modal like *must* in English.

0. 本小論の目的は、いわゆる FSP（機能的文構成）による分析の具体的な適用例として、現代日本語で一般に文末に置かれる「ダ」の用法を集約的に考察することである。ここには、現代日本語における発話構成上の問題点、又は伝達上の特徴が幾つか含まれている。以下、順を追ってそれらを解明して行きたい。

1. 「ダ」の用法に関しては、様々な立場での分析がなされて来た。一部だけあげても、たとえば、「ダ」は形容動詞的な活用で指定の意味を持つ助動詞である——橋本（1948）——；「ダ」は断定の語であって論理学にいう主辞と賓辞の間に判断関係の成立することを表現する——佐久間（1965）——；「ダ」は助動詞的性格を持ち会話語といってもよい——吉田（1971）——など各様である。ただし、上記の意見には、いずれも、「ダ」は体言と接続して叙述性を持つという趣旨の説明がある。これから察する限り、これらは、文法的な形式面で文を主部と述部に分けた場合、「ダ」は述部に属し主部とは直接関係がない、という意見であると了解される。これに対し、時枝（1971）は、「ダ」は指定の助動詞であり文全体に対する思想の統一作用の表現である、とする。すなわち、「ダ」には主部+述部の全体をまとめる機能がある、という説明である。

以上を要約して、具体的に「ダ」を含む表現の分析を時枝（1975）の例文で示せば、大別して(1)a. b. の二種になると考えてよいであろう。

- (1) a. 今年ハ豊年ダ。(すなわち Xハ-Yダ。)
b. 今年ハ豊年-ダ。(すなわち XハY-ダ。)

ただし、これは主として文法的な形式上の問題を中心にした分析であって、やや単純化されている。そこで、実際の用例を、文法的形式だけではなく発話構成の面からもよく検討することから出発しなければならない。

2. まず文法的形式の面からは、「ダ」は一般に体言と呼ばれるもの、引用句、文などと直接に連結するのが普通であり、用言とは接続しない^①、とされる。用言と結びつく時は、「……ノダ」「……コトダ」のような形式となる。つまり、「ノ」や「コト」によるいわゆる体言代用格を必要とする。なお、伝聞や様態、推測などをあらわす助動詞とされている「……ソウダ」「……ヨウダ」もこの変型と考えるとよいであろう。

そこで、たとえば(2)a. b. は、現代日本語では非標準的又は方言的で、(3)a. b. が標準的用法となる。

- (2) a. スル（シナイ、美シイ）-ダ。
b. シタ（シナカッタ、美シカッタ）-ダ。
(3) a. スル（シナイ、美シイ）ノ-ダ。
b. シタ（シナカッタ、美シカッタ）ノ-ダ。

「ダ」とほぼ等しい役割を持つと考えられる「デアル」についても同様である。

しかし、「ダ」を助動詞又は形容動詞の終止形と見なし、他の活用形があると考えられる場合は、上記の制限がなされない場合がある。すなわち、(4)および(5)は標準的である。

- (4) スル（シナイ、美シイ）-ダロウ。
(5) スル（シナイ、美シイ）-ナラ……

すなわち、伝統的な日本文法の用語を用いれば、「ダ」が未然形、仮定形などの場合には、他の用言の終止形と直接の連結が可能である。

又、しばしば「ダ」の丁寧体とされる、つまり文体論的な差を示すのみと考えられる「デス」は、「ダ」に比して上記の制限が少ない。たとえば(6) a. b. は標準的である。

- (6) a. シナイ (美シイ)-デス。
b. シナカッタ (美シカッタ)-デス。

ただし、(7)は(2) a. ほどではないが多少非標準的な感がある。この場合は「ノデス」形がよいとされるであろう。

- (7) スル (シタ)-デス。

このような判定は、いわゆる直観によるものであり、当然個人差がある。たとえば、松下(1961)によれば、「有るです」は無活用語+動助辞で、標準的な用法として扱われている。

注意すべき用法として、(8)のように「ダ」が文末だけでなく文中にも用いられる場合がある。これは、一種の区切りを示すと同時に「ダ」に先行する語句に対してある種の強調又は指定を与える言い方と考えられる。

- (8) ソレハ-ダ, 要スルニ-ダ, 政治ノ問題-ダ。

(9)の用法は、(8)と共通性を持つものであろう。すなわち(9)では、「ダ」に先行する引用句(又は文)全体が強調又は指定される。

- (9) 善ハ急ゲ-ダ。

なお、「ダ-カラ」「ダ-ノニ」のように、「ダ」を独立した指示詞とする用法もあると考えられる。

以上は、各用法における「ダ」がすべて同一の語彙項目(又は単語)であるとする場合の説明であるが、金田一(1953)のように、活用を持つ「ダ」と活用を持たない「ダ」とを区別する考え方もある。

3. 上記と関連して、「ダ」と「ヨ」「サ」「ネ」などとの用法上の関係も考慮すべきである。「ヨ」「サ」「ネ」など、一般に終助詞として分類される語群は、(10)(11)で示されるように、「ダ」と同じ位置に置かれる。又「ダ-ヨ」「ダ-ネ」など、重ねて用いることもある。

- (10) スル (シナイ, 美シイ)-ヨ (-サ, -ネ)。
(11) ソレハ-ヨ(-サ, -ネ), 要スルニ-ヨ (-サ, -ネ), 政治ノ問題-ヨ (-サ, -ネ)。

もちろん、それぞれの語の意味と用法には一定の差があり、各語とも文体論的な制限を受ける。これは、日本語の大きな特色とも言える微妙な男女別用語や待遇表現の問題とも関連して、事態を複雑にする。たとえば、(12) a. は多少男性的、(12) b. は多少女性的となるであろう。

- (12) a. スルノ-ダ (-サ)。
b. スルノ-ヨ (-ネ)。

前述の「ダ」と「デス」の差についても、補説する必要がある。すなわち、「ダ」は一般に口語としては男性の用語という感じが強く、女性が用いるには幾分抵抗感があるろう。これに反し、「デス」は男女差を感じさせないが、身分の上下関係、親疎の度合と関連する。すなわち待遇表現上のある位置を示す可能性がある。しかも文体論的に比較すると、いわゆる「ダ」「デアル」体では必ずしも「ダ」を用いないと思われる場合でも、「デス」体では単に丁寧さを示すために「デス」を用いることさえある。たとえば、(13 a. b.) と(14 a. b.) を比較せよ。

- (13) a. コレハ 面白イカ。
 b. ウン, 面白イ。
 (14) a. コレハ 面白イデスカ。
 b. ハイ, 面白イデス。

(13 b.) で「ウン, 面白イノダ」と答えるのは特殊な感じを与えるが、(14 b.) は全く標準的である。従って、これらの点から考えれば、「ダ」と「デス」とはもっと厳密に区別すべきであろう。

その他「ダ」の語感として、不審又は糺明を明示する場合がある。たとえば(15)の形式は日常的に使用されるが、「ダ」の代りに「カ」を用いる形と比較すれば、微妙な差が認められる。

- (15) コンナコトヲシタノハ 誰ダ。

又、(16)のように、軽蔑やあざけり、例示を示す用法もある。これは一種の引用となる場合が多く、(9)の例と一致する。

- (16) ザマヲ見ロ, ダ。

これらは、いずれも文末の「ダ」に関するものであるが、前述のように文中の要素に付属して用いられる「ダ」もあるので、統一的な記述には工夫を要する。

4. さらに、できるだけ絞って「ダ」の用法を考察するとすれば、典型的な用例は、(1) a. b. を統合した形、すなわち(17)で示される形式になるであろう。

- (17) Xハ Yダ。

この形式は、XとYの間に、何であろうとともかく何等かの文脈的意味的関連があれば使用できる、極度に融通性のある表現である。この形式は現代日本語で実に多く用いられ、永野(1970)によれば、これは日本語の思考様式を代表する文型とされている。ただし、これを独立させて考えた場合、XとYとの関連についての判断は、すべて聞き手(又は読み手)に一任されるという点に特徴がある。つまり、この形式によって、日本語による伝達の暗示性又は陰喩性が極度に高められる。

しかし、現実の場面でのやりとりでは、文脈又は情況に助けられて、聞き手(又は読み手)が判断に迷うことは少なく、大きな支障は感じられない。これは、日本語による伝達が高度に文脈又は情況依存的で、いわば相互の勘の良さに頼るからであり、そのような勘の良さが伝統的に重視され発達して来たからであろう。

上述のように、日本語による伝達を習慣としている社会では、日常生活の中で(17)の形式、すな

わち「ダ」の機能を問題にすることはほとんどない。しかし、一步踏み込んで考えると、未解決の点が非常に多い。以下、「ダ」の機能を中心にした考察を進める。

5. まず、比較的多いのは、「ダ」を英語の *be* 動詞のような繫辞 (copula) の一種とする意見である。しかし、これは不適切であろう。たとえば⑬などの具体的例文についての考察で明らかである。

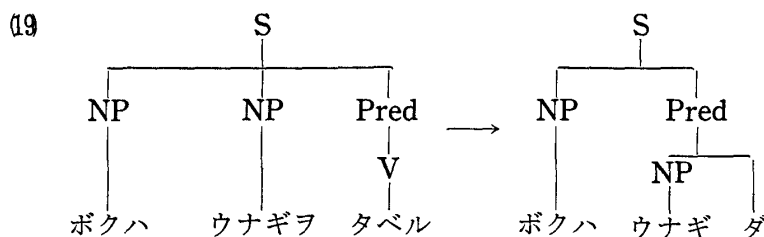
⑬ 太郎ハ 東京大学ダ。

⑬の実際の意味は、もちろん文脈又は情況によって決定される。たとえば「太郎ハ東京大学ノ学生(教職員)デアル」「太郎ノ出身(志望)校ハ東京大学デアル」「太郎ハ今東京大学ノ構内ニイル」「太郎ハ東京大学が好キ(嫌い)デアル」等々、文脈又は情況に応じて多種多様に解される。しかし、太郎そのものが東京大学ではないこと、つまり「ダ」≠*be* でないことは確実である。

それでも、多くの日本人には「ダ」が *be* と同じ機能を持つと考える傾向がある。これは、初歩の英語学習段階で、*be* の訳語として「デアル」が与えられることが一因となっているのかも知れない。とすれば、対照言語学的な立場から、何か考慮する必要がある。又、同様に有力な印欧語である英・独・仏語などとの対比によって、繫辞を用いなければ論理的に不完全であるから、「ダ」にその機能を与えようとする意見もある。しかし、これも不必要な配慮であろう。(実際に繫辞を用いない言語も数多い。たとえばインドネシア語、ハンガリー語、又印欧語中でもロシア語など、少なくとも部分的には繫辞を用いない文が標準形となっている。⑭)そこで、「ダ」に関するもっと一般的な取扱いが要求されることになる。

6. このような「ダ」に対する考察の最近の例として、奥津(1978)と久野(1978)をあげることができる。両者の意見は、従来のものと一見対照的である。いわゆる日本文法で、すでに古典的となっている「ボクハウナギダ」という例文について、両者を比較検討してみよう。

奥津(1978)は「ダ」を動詞の代用形と考え、変形生成文法の立場から次のような図(同書 p. 32)をあげて説明する。



これによれば、矢印の左辺の「(ヲ) タベル」が「ダ」によって代用される、すなわち「ダ」は代動詞で「ウナギ」がその補語となる、という分析である。これに近い意見は従来もしばしば提唱され、前述の如く「ダ」における叙述性という形で論議されて来た。しかし、この考え方によれば、⑬の例のように多種多様の、理論的には無数とも言える深層構造を設定しなければならず、又動詞的要素以外のものの代用も兼ねることとなり、收拾がつかなくなる恐れがある。事実、奥津(1978)には代用の例が多数あげられているが、それで十分とは思われない。

一方、久野(1978)は「ダ」ストラテジーという用語を導入して、「ダ」には文を形成する機

能があると認めている。そして、このような場合は、(文脈的に)復元可能な動詞的要素を省略した上で、改めて「ダ」を追加して文の資格を与えるのだという立場を取る。

久野(1978)は「ダ」の品詞的分類には直接触れていないが、機械的に考えて、省略+追加=代用 という式が成立するならば、奥津、久野両者の意見には大きな相違があるとは思えない^③。しかし、「ウナギ」の部分はこの文構成の中でどう位置づけるかの説明については、幾分差が認められる。

奥津(1978)は、焦点化という用語で「ウナギ」の持つ重要性を示唆しているが、同時に「ウナギ」を補語と規定している。補語という用語は、「ダ」と「ウナギ」との関係をやや固定化する感じがある。一方、久野(1978)は、新情報が「ダ」の前に置かれる、という表現で、「ウナギ」が最重要の要素であり、「ダ」は一つの枠を作るに過ぎないと理解される記述をしている。しかし、以上をつきつめて行けば、結局、奥津の見解も久野の見解も、前述の(1)a.のタイプに通ずるであろう。ただ、いずれにせよ、代動詞とか「ダ」ストラテジーというような概念と用語の提起は、明らかに機能的分析法を示すものと言えよう。

7. 久野(1978)の分析も、明記されているように、本来は、生成文法の枠組から出発している。ただし、文を最大の分析単位とするのではなく、いわゆる談話を対象とする、又は談話を背景とする文の分析であり、言語的非言語的文脈又は状況によって、文を構成する単位を分析しようとする試みである。ここでの談話という用語は、一つの物語的説明(又はモノログ)を指すのか問答形式(又はダイアログ)を示すのか幾分不明確であるが、とにかく文(又は発話)の集合をあらわすことは確実である。又明示されていないが、代用という用語がすでに文と文との関係を暗示するものであるから、奥津の分析も当然談話を前提とするものと解される。

この種の文法をしばしば談話文法などと呼び、文を最大の分析単位とするいわゆる文=文法と対比することがある^④。なお、久野の用語である談語法と構文法も、この差を示すものと言えよう。

この両者の区別を、単に談話(又は文章)と文という二つの分析単位の量的な差によるものとするのは誤りであろう。なぜなら、ここでいう文=文法では、文脈と直接関連のない独立した文を分析することができ、各構成要素をその立場で設定できるが、談話文法における文は、それ以外に常に具体的な文脈の制限下に置かれるからである。換言すれば、文=文法では文法的形式の分析が中心になるのに対し、談話文法では発話構成における機能的分析が中心になる。この点で言えば、文=文法と談話文法の相違は、量的なものではなく質的なもの、つまり言語分析上のレベルの差と考える必要がある。

文=文法と異なり、具体的な文脈の制限下にある談話文法では、その文集合に属する各文を連絡して行くある要素を設定し、それを基準として分析しなければならない。奥津(1978)の分析には明示されていないが、久野(1973, 1978)の用語である新情報、旧情報はこの役割を果す。すなわち、談話文法における文は、新情報を伝える部分と旧情報を伝える部分から成り立つ、とする。

このようないわゆる FSP による分析法は、すでに V. Mathesius などによって以前から示された方法であり、広く認められて来たものである。しかし、この分野における用語とその概念は決して一様ではなく、それらを十分に検討しておく必要がある。たとえば、この理論の中心的存在であるいわゆるプラグ学派に属する人々の見解だけに限っても、すべて同じというわけではなく、微妙な点で差がある^⑤。その詳細は省略せざるを得ないが、本小論では、J. Firbas の

提案する伝達動力 (Communicative Dynamism=CD) による分析を「ダ」を含む文を対象として試みる。

8. CD の概念は、伝達は静的な現象ではなく動的な性格を持つ、という認識から出発している。これは、情報の展開、談話の発展に関して伝達現象が示す性質であり、個々の構成要素が帯びる CD の程度又は段階は、その要素が伝達の伸展に貢献する度合によって決定され、経験的帰納的な方法で測定される。ある要素の CD 測定のための具体的な要因をあげれば、その伝達内での線条的位置、意味的・文法的構造関係、文脈依存度 (又は聞き手もしくは読み手の理解度) であり、さらに音声化した場合の強調度である。そして、個々の構成要素は CD の量又は程度に応じて、その言語構成単位 (基本的には文) 中で分類され、CD が最小のものはテーマ (T), 最大のものはレーマ (R), 中間的なものはメディウム (M) とそれぞれ命名される。なお、細部については、特に Firbas (1979), 飯島 (1980) を参照されたい。

9. 実際に CD による分析を(17)に適用すれば、次の記述が可能であろう。

(20) 「Xハ Yダ」において、「X」ハ一般にTとなり、「Y」ハ一般にRとなる。

Tを標示する「ハ」の用法については、多くの論議があるが、ここでは説明を省略する。

一方、「ダ」の用法と関連するRの指定については、若干説明を要する。すなわち、Rの指定法としては、音声的、形態論的、統語論的にそれぞれの面での手段が考えられるが、(17)は、それらすべてを総合したものと言える。つまり「Y」は、音声的に主強勢が置かれ、形態論的にRを指定し得る「ダ」に直接先行し、日本語の標準的 $\dot{C}\dot{D}$ 配分^⑥、すなわちT—R—Mによって統語論的に示されるRの位置を占めている。これを確認するため、飯島 (1980) の CD の基本的計算式 ($CD = \frac{E+L}{U}$ ^⑦) によって試算してみる。

まず「Y」の CD 値は、およそ(21)の範囲となるであろう。

(21) $2 \leq Y$ の $CD \leq 6$

一方、「X」の CD の範囲は(22)で示される。

(22) $\frac{2}{3} \leq X$ の $CD \leq 2$

ただし、この場合「ハ」によるTの標示があることを考慮して修正値 -1 を加えれば、最大値はもっと低くなる。さらに「ダ」そのもののCDは、Uを3として計算すれば $\frac{4}{3}$ となる。従って(23)の関係が成立し、実際に(24)で示される FSP となる。

(23) Xの CD < 「ダ」の CD < Y の CD

(24) $\frac{X}{T}$ ハ $\frac{Y}{R}$ ダ $\frac{M}{M}$

この FSP は、日本語として典型的なもの、すなわち無標の構成であり、「ダ」は CD の面ではMとなり、TとRの仲介的役割を果すことを示す。

ただし、「X」に指標として「ガ」がついた場合は、「X」がRとなり、(25)で示される有標の

CD 配分となる。

$$(25) \frac{X}{R} \text{ガ} \frac{Y}{T} \text{ダ} \frac{\quad}{M}$$

ここでは、主強勢が「X」に置かれるので、Uの値、つまり分母を3とすれば、「X」のCDは、 $\frac{3+1}{3}$ にRの指標「ガ」による修正値+1を加えたもの、すなわち $\frac{7}{3}$ 、YのCDは、基本的に $\frac{1+3}{3}=\frac{4}{3}$ であるが、有標のCD配分による修正値-1を加えると $\frac{1}{3}$ 、「ダ」のCDは $\frac{4}{3}$ などと計算可能である。

又、もうひとつの可能性として、「Y」が文頭に来る形式、すなわち(26)も起り得るが、この場合でも同様な計算によりFSPを示すことができる。

$$(26) \frac{Y}{R} \text{ダ} \frac{\quad}{M} \frac{X}{T} \text{ハ}$$

ただし、「ダ」は文末を示すものとして、その機能を重視すれば、「Xハ」の部分は付加的なものとなり、その処理には別の考慮を要する。

以上で「ダ」を含む文のFSPによる検討が一段落するが、さらに注意すべき点を考慮する。

10. 6.に述べられたように、「ダ」ストラテジーを認める考え方によれば、「ダ」には文を形成する機能がある。しかし、実際には「ダ」を用いなくてもよい場合がある。すなわち、(27)で示される表現が、日本語では日常的に用いられて、十分に伝達の目的を果している。

$$(27) X \text{ハ} Y。$$

たとえば「ボクハ ウナギ」「パパハ 会社」「オヤツハ 戸棚」など。この形式は諺やスローガンにも多用される。古典的に有名な表現としては「春ハ 曙」などがある。

さらに論を進めれば、「ハ」さえも用いられぬことがある。すなわち(28)の形式である。

$$(28) X Y。$$

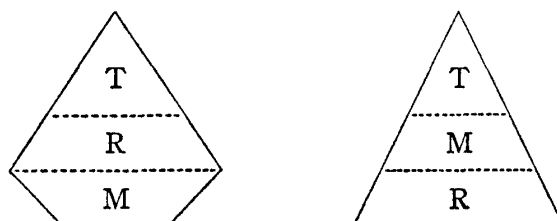
たとえば「ボク ウナギ」「パパ 会社」など。この表現は、多少舌足らずの印象を与えるが、標語的にもよく用いられる。「父サン温泉, ボクスキー」「注意一秒怪我一生」など、意味不明で理解に苦しむ、とは言えない。そして、このような、文末に「ダ」のない、ただ単語を並べたとしか思われぬ形式が十分な伝達機能を持っているという事実は、当然FSPとの関連で説明されなければならない。それは同時に、「ダ」の機能についても、ある手がかりを与えるであろう。

11. (27)(28)のような形式が認められるのは、日本語におけるCDの標準的配分がT—R—Mであることの一傍証ともなり得る。すなわち、Rの標準的位置がこの場合Tの直後にあると了解されるので、この統語法的原則により、Rは自然に指定され、又Tの形態論的標示である「ハ」も不要になる。又TとRの意味的関連から、Mの推測、又は暗示が可能になる。その結果、話し手は聞き手にMの意味内容の決定又は選択をゆだね、聞き手は話し手の意向を察して判定することになる。この点は、すでに4.で述べたように、日本語による伝達の大きな特徴であろう。もちろん、他の諸言語でもこのような現象は見られる。特に幼児の言語習得の初期段階、いわゆる2語

文の時期には、この種の伝達は普遍的である。しかし、いわゆる電報文や標語などの場合を除いては、このような形式を日本語ほど多用する言語は少ないと思われる。その理由を説明するのは、上述のように、日本語における CD の標準的配分であろう。

上述の CD 配分、つまり T—R—M により説明すれば、日本語の標準的伝達形式は、CD の点から見て中央部が膨脹した不安定な形である。もっとも、見方を変えれば、この形は最後の M の所でバランスを取る、いわばダルマ型と考えてもよい。これに対し、英語その他 T—M—R 型の言語では、底辺部が最大になる安定的な三角錐型で示すことができる。すなわち(29) a. b. の図式でその比較が可能であろう。

(29)



a. 日本語

b. 英語など

この図によれば、(27)(28)の形式は、Mの切り捨てと考えられる。この現象は、 $\dot{C}\dot{D}$ の基本的配分^⑧、すなわち安定的な三角錐型への指向と考えられないだろうか。Mの切り捨ては、(29) a. の底部、すなわち文末部の持つ CDを最大にさせ、聞き手に最も強い衝撃を与えることになる。これは伝達上大きな効果を持つであろう。このようなMの切り捨ては、英語などでは、その CD の配分上、日本語のように簡単でないと思われる。(ただし、贅辭的なものは弱くなる。たとえば英語の *be* 動詞は *It's me.* のようにしばしば弱形となる。)

ただ、Mの切り捨て、すなわち(27)(28)の形式は、日本語の一般的な習慣から言えばややぶしつけな感じを与える。そのため、しばしば丁寧な感じを強調するMを置く。たとえば「……デゴザイマス」等々。この種のMは、現実の伝達面で一種の緩衝的機能を持つものである。従って、この部分を特に高く強く音声化することは、多くの場合違和感を生ずる。現に、この事実の別の表現法と思われるが、日本のある詩人は、語尾をはっきりさせずに波が消えるように終りが消えるのが日本語のよい点である、という趣旨の感想を述べている^⑨。

12. 上述の如く(27)(28)の形式は、文法的形式および CD の配分の点では省略感があるものの、実際の伝達又は陳述内容においては「ダ」のついた形、すなわち(17)と同じと考えられる。つまり、もし(17)が陳述の面で完全文であると見なされるなら、(27)および(28)もその面では十分な機能を果していることになる。結局、完全文という概念は文法的形式での問題であり、発話構成のレベルでは別の基準で文の完全度を考えねばならない。

ここで文の定義が改めて問題になるが、たとえば Mathesius (1961) や Firbas (1964) は、ある絵画の作者の署名 *L. Kuba* や、不快の表現 *Br!* なども文と認めている。日本語の場合でも、南 (1974) のように、「松村呉服店」や「グレープフルーツ一個100円」なども文と認める意見がある。この考え方が正しいとすれば、少なくとも発話構成のレベルにおいては省略文という概念を設定する必要はなくなるであろう。もちろん、不完全な発話とか誤用などは考慮すべきであるが、伝達の目的が慣用的形式によって果される限り、省略は存在しないと言える。従っ

て、発話構成のレベルにおける「ダ」の機能も、代用又は省略を補う、ということではなく、別の面で考えなければならない。

13. 以上、「ダ」およびそれに関連する形式について観察される諸事項を簡単に述べたが、「ダ」の品詞的帰属については決定し難い。すなわち、「ダ」を助動詞の一形式（終止形）とすべきか、形容動詞と考えるべきか、又は「ダ」の終止形だけを独立させて終助詞的な不変化詞と見なすべきかについて、決定的な答が与えられない。おそらく文法的形式の面では、活用があると考えて助動詞の仲間とする意見が有力であろう。もちろん、これは伝統的な考えに従うもので、活用があるかないかを根本的な基準とする。

しかし、機能面を中心にして考えれば、前述のように、「ダ」は「ヨ」「サ」「ネ」などのいわゆる終助詞と共通の用法を持っている。もちろん、他の助動詞的要素「……デキル」「……カモシレナイ」などとも共通性がある。つまり、これらの語は活用の有無に関係なく、一般に文末に置かれて一種の終結感を与え、それに伴う一定の判断、態度、情緒などを語彙的に示すものである。これらは一般に法的性質 (Modality) と呼ばれるが、日本語における一つの特徴は、この法的性質が文末に置かれ終結を示す要素によって表現されることである。従って、「ダ」を含めてこれらの要素を持つ文は、(1) b. の形式と考えるのが妥当であろう。機能的な又は談話文法的な立場からは、これらの要素、すなわち、終助詞および助動詞全体を含めて、仮に命名すれば終結詞 (Conclusives) というような語類の設立が提案できるのではないだろうか^⑩。再度繰返せば、この語類の主な機能は、その文の終結を明示すると同時にその法的性質を伝達することにある。ここで言う終結詞と用法的に比較され得るものが他の諸言語にも存在すると思われる。たとえば、朝鮮語にはいわゆる措定詞の *-i'o* (又は *-yo*)、中国語にはいわゆる語気助詞の *-le* (了) および *-de* (的) などがある^⑪。さらに、多少の差が感じられるが、英語のいわゆる付加疑問文 (tag-question) ……、*isn't it?*; フランス語 *n'est ce pas?*; ドイツ語 *nicht wahr?*; チェコ語 *Ze ne?* なども機能的には終結詞に類するものと言えよう。

終結詞と似た概念は、すでに日本における各種のいわゆる陳述論、又は文論で論じられている。しかし、多くの場合、形式的細分化に関する論議が多く、機能面を幾分軽く考える傾向があるように思われる。粗雑すぎてはならないが、機能的観点から考えて、新しい分類が可能ならば試みられるべきであろう。もちろん、終結詞という概念が妥当であるかどうかは、今後なお検討の余地が多分にある。

終結詞という命名が不適切であるとしても、とにかく「ダ」は一定のまとまりを感じさせ、この語類の代表的存在である。この点で「ダ」は、従来の幾つかの説の通りに、話し手の判断と関係を持つ。すなわち、「ダ」には、「……トワタシハ判断 (決定) スル」「……ニチガイナイ」「……スベキデアル」で示せるような、叙述上の視点の固定を示す機能がある。この意味で「ダ」は法的性質を示すのであり、Palmer (1979) の記述する英語における *must* の用法と共通点を持つ^⑫。さらに、Lyons (1977, II) に述べられている如く、*must* (又は *may*) を含む文 (および他言語でそれに該当する要素を含む文) の持つ多義性も、「ダ」の場合と類似点がありそうである。

ただ、英語における視点の固定、又は法的性質の表示は、文頭に近い位置でなされる傾向が強い。英語ではそれと同時に、前述の終結詞的要素によって文末で念を押すことも可能である。すなわち、英語でこのように位置によって二分し得る機能を、日本語ではすべて文末で処理する傾

向がある。これは、よく説かれるように、日本語の特徴とされる文末決定性の一部となるであろう。

さらに、より大きな単位としての発話集合の中で、「ダ」を含む文、つまり視点の固定又は修正を行う文が、段落や文章、すなわち発話集合の末尾に現れることが多いという林 (1964) の指摘は興味深く、暗示的である。

13. 以上、幾つかの面での機能的な考察の結果を、やや整理して記述すれば、「ダ」の用法は次のようにまとめられるであろう。

「ダ」は、一種の終結詞として主に文末に置かれ、伝達の法的部分を構成する要素となる。CD の立場から説明すれば、それに先行する要素（文法的形式のレベルにおける単語、句、節など）の発話構成レベルにおける CD を高め、しばしばその要素を R として指定する機能を持ち、一般には T と R を仲介する M となる。意味的には、話者の判断、叙述視点の固定、さらに不審や軽蔑の念を示す。なお、特殊な用法として、独立した一種の指示詞ともなる。

上記が、FSP を中心とする分析を「ダ」に適用して得られる暫定的な結果である。

〔注〕

- ① 「……(ス)ベキダ」のような例外的な形もある。ただし、「ダ」と「ベキダ」とを別の語と考えることもできる。又「ダ」の方言形として、「ジャ」「ヤ」などがある。
- ② 例をあげれば、日本語の「コレ(ハ)本(ダ)」にあたるのは次の通りである。
 インドネシア語：Ini buku.
 ハンガリー語：Ez könyv.
 ロシア語：Это КНИГА.
- ③ 事実、牧野 (1980) では「ダ」ストラテジーにおける「ダ」を代動詞と表現している。
- ④ たとえば、井上 (1979)。なお、Daneš-Viehweger (1977) では、Text と Satz の関係が多角的に検討されている。又 Halliday-Hasan (1976) 参照。
- ⑤ たとえば F. Daneš と J. Firbas は、用語としてともにテーマ、レーマを用いているが、内容規定に若干の差がある。又 P. Sgall は英訳形として topic と focus を使い、文脈制限性を基準とする。
- ⑥ この概念は、Firbas の提案する $\dot{C}\dot{D}$ の基本的配分とは別である。なお、Firbas 自身の用語では、M は transition である。飯島 (1980) および本論の注⑧参照。
- ⑦ E=音声的強調度 (1, 2, 3); L=線条的位置 (1, 2, 3); U=聞き手の理解度に関する話し手の判定 (1, 2, 3)。(Firbas その他は、イントーネーション・センター (IC) という概念で R の位置を示す手段を取るが、日本語の場合は、音声的手段だけで R を標示するのは難しいように思われる。) なお、実際には、基本式に各種の理由による修正値 ± 1 を加算する必要がある場合も多い。詳細は飯島 (1980) を参照されたい。
- ⑧ この概念は、Firbas が言語的普遍性の一つと考えているものである。すなわち、CD を除々に高めて、文頭に T を、文中に M を、文末に R を置くのが、人類の言語における普遍的な傾向だと仮定する。ただし、実際の各言語では、意味的文法的構造との葛藤により、必ずしもこれが実現されない。たとえば、日本語における CD の標準的配分は、この意味での基本的配分とは一致しない。なお、飯島 (1980) 参照。
- ⑨ 堀口大学氏の新聞談話 (朝日新聞1979年10月19日付夕刊) による。

- ⑩ 実際に、たとえば宮地（1970）には、文脈にかかわる、文章論（すなわち談話文法）的文法形式が指摘されている。
- ⑪ 例をあげれば、朝鮮語 Na-nūn co-sōn-sa-ra-mi-yo（わたしは朝鮮人です）；中国語 吃飯了（食事だ）。他昨天到的（かれは昨日来たのだ）。
- ⑫ Palmer（1979 p.44）によれば、*must*を‘conclusion’の点からパラフレイズですると‘The only possible conclusion is that ……’となる。これは epistemic modality に属し、necessity を示すものである、とされる。

参考文献

- Daneš, F.—Viehweger, D. (eds.) (1977) *Probleme der Textgrammatik Studia Grammatica XVIII* Berlin, Akademie-Verlag
- Firbas, J. (1964) ‘On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis’ *Travaux Linguistiques de Prague 1*
- . (1979) ‘A Functional View of “ORDO NATURALIS”’ *Brno Studies in English* vol. 13 pp. 29-59
- Halliday, M. A. K. -Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*, London, Longman
- 橋本進吉（1948）『国語法研究』東京 岩波書店
- 林 大（1964）「ダとナノダ」『口語文法の問題点』講座現代語 vol. 6 東京 明治書院 pp. 282—289
- 飯島 周（1980）「伝達動力について」『跡見学園女子大学紀要』No. 13 pp. 120—130
- 井上和子（1979）「古い情報・新しい情報」『言語』vol. 8 No. 10 pp. 22-34
- 金田一春彦（1953）「不変化助動詞の本質——主観的表現と客観的表現の別について——」『国語国文』vol. 22 No. 2—3 『日本の言語学』vol. 3（1978）東京 大修館 pp. 207—249に再録
- 久野 暉（1973）『日本文法研究』東京 大修館
- （1978）『談話の文法』東京 大修館
- Lyons, J. (1977) *Semantics I, II* Cambridge, London, New York, Melbourne Cambridge Univ. Press
- 牧野成一（1980）『くりかえしの文法——日英語比較対照——』東京 大修館
- Mathesius, V. (1961) *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém Praha* Nakladatelství Československé Akademie Věd 英訳は *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis* The Hague・Paris・Prague Mouton・Academia 1975
- 松下大三郎（1961）『標準日本口語法』東京 白帝社
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』東京 大修館
- 宮地 裕（1971）『文論』東京 明治書院
- 永野 賢（1970）『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京 東京堂
- 奥津敬一郎（1978）『「ボクハウナギダ」の文法——ダとノ——』東京 くろしお出版
- Palmer, F. R. (1979) *Modality and the English Modals* London, New York Longman
- 佐久間鼎（1966）『現代日本語の表現と語法』東京 恒星社厚生閣
- Sgall, P. (1979) ‘Towards a Definition of Focus and Topic’ I, II *The Prague Bulletin of Mathematical Linguistics* 31, 32
- 時枝誠記（1975）『文法・文章論』東京 岩波書店
- 吉田金彦（1971）『現代語助動詞の史的研究』東京 明治書院

（本研究は昭和55年度跡見学園特別研究助成費によるものである）